

ソードアート・オンライン
インをプレイしたなら
ステージゲームだった件につ
いて

盗賊8

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

寝て起きるとそこは見知らぬ場所、ではなく自分の小さい頃の部屋が広がっていた。しかもオリ主の身体も縮んでいたのだ！

何故だろうと考えるが、自分を見つめ直すために叔父に剣道（剣術）を教えてもらうことになる。

そして数年後、心身ともに鍛えられ、立派な男へとなった
そんなある日、あるゲームのβテスターに選ばれ…

こんな展開あつたら面白いなあと思ひ、書きました！どうぞ見てください

目次

- 努力を経て俺は… ゲームの世界へ 1
- 13 デスゲームの始まりとまさかの出会い

努力を経て俺は... ゲームの世界へ

ピピピピ

ん? もう朝か

「葵ももう朝よ? 朝ごはんできてるから下りてきなさい」

「うん、今起きたよ」

あれ? なんだか声が違うような... うん、気のせいだな

「あくすつげえ眠い。」

昨日遅くまでゲームやりすぎたな」

因みにプレイしていたのはCODBO3である... IW? いや、昨日はBO3をした

い気分だったんだよ

俺は眠たい目を擦りながら目の前にはあるはずのコントローラーを探す... あれ? 無いぞ? というか本当にここは俺の部屋かと、考えていると母さんが部屋に入ってくる

「ご飯、冷めちゃうわよ?」

え、俺の母さんってこんな若かったっけ?

「え、本当に母さん? 美人過ぎない?」

今言った通り、俺の母さんはもう少し…：…なんというか、老けている筈なのだ

「あら？どこでそんな褒め言葉を知ったの？まあ素直に受け取っておくわ…：…あ！本当に早くしないと駄目じゃない

小学校の入学式の次の日から遅れたら嫌でしょ？」

き、昨日が入学式だったの？ why？お母様？私は高校3年ですよ？

そう思っていたのだが、今更になって気づいた

え、俺の身体…：…縮んでね？



あの後、ご飯を食べて着替えを済ませたので学校に向かおうと玄関で靴を履いている時に気になった事を聞いてみた。

「お、お母様？今2000何年ですかね？」

「どうしたの急に？そんな喋り方して…：… 2012年よ？」

「(はい?! いやいやありえないって!) あ、ありがとう」

「?」

首を傾げる母さん…：…くそっ！親なのに可愛いとか思っちゃまった

ついでに言っておくと俺の母さんを簡単に例えると由比ヶ浜結衣の母親の髪型を黒にした感じの人だな？可愛いだろ？

いや、そんなことよりもだ。俺が生まれたのは確か、2000年で、最後の記憶はB03で30キル17デスの1位でラスキルをハイテンション状態でのヘルストームで終えた2017年だったはず..

ということはタイムスリップしたことか？いやいやなんでだよ！ ドラえもんと面識ないぞ？

それ以前にタイムスリップだとしてもおかしいだろ

主に時間枠がな？どうなってるんだか

「はい、それでは次に二宮葵さんお願いします」

「...」 ↑考え事をしていて聞こえていない

「...」

無言で立ち上がり目の前まできて、肩を叩く

「葵さん？自己紹介お願いね？」

「あ、すいません...緊張してしまってます」

あ、危ない第一印象が先生の言うことを聞かない子になる所だった

「二宮葵（このみやあおい）です。名前が女の子っぽいですが正真正銘の男なので間違えないで下さい

趣味は読者と料理です

みなさんこれからよろしくお願いします」

よし、素晴らしい自己紹介だった。うん

しかし場は静まり、数秒間世界が停止したように錯覚した。

あれ？なんでみんな静かなの？

と、思っていたがよくよく考えたら小学一年生でこの自己紹介はないだろ…と今更

気づいた

「え、えっと次の人お願いします」

と、先生の進行がスタートし、自己紹介の続きが始まる

微妙な空気で学校生活がスタートしたのである

「はあ、なんだろうこうなる前は小さい頃からやり直したいと思つてたけど… 実際な

るとなあ…」

下校途中、やや落ち込んだ感じでそう愚痴をこぼして近くにあつた石をける

「…いや待てよ」

こうなる前の自分をもう一度思い浮かべろ…今は普通に顔は悪い方ではない…

むしろいい方だ、と思いたい。しかしどうだ17年後の俺は

いつからか勉強が出来なくなり、ゲームやアニメをみたりするばかりの毎日

それによって増えていった体重のおかげで、デブに近い体型になった

クラスメイトからはバカにされた

女子からはオタクと認識されて気持ち悪がられた

そうなっていないのか？

「いや、良くないな」

そう決心した俺はすぐさま自分の家に走った



家に着くと自分の部屋にランドセルを置き、すぐさま俺の爺ちゃんが教えている剣道

場（爺ちゃんの家の隣にある）まで走ってきた

「はあ…はあ」

全速力で走ってきたので荒く吐いていた息を一旦整え、爺ちゃんがいるであろう道場に向かう

懐かしいなあ…最後に来たのはいつだっただろうか

「む？あ、あ、葵ではないか！小学校入学おめでとう！」

俺を見るなり瞬時にこちらへと移動し、頭を撫でてきてくれる

「あ、ありがとうお爺ちゃん！あの、頼みがあるんだけど」

あー凄え恥ずいわ…いやだって精神年齢17歳ですよ？

というかその前に…今、どうやって一瞬で距離を詰めたの？それ剣道なの？わたし、気になります！

「できる限りの事はしよう…頼みってなんじゃ？」

まあそんな疑問は置いて

まず、剣道を始めて精神力と身体を鍛える。昔じいちゃんに誘われ時に色んなことに役立つとも言っていたしね

「僕に剣道を教えて欲しいんだ！お願い！おじいちゃん」

と、頭を下げてお願いすると

「ど、どうしたんじゃ急に...?」

と、最初は嬉しき半分ながら焦っていたが、

「俺は敵しいぞ?それでもやるのか?」

先ほどまでの優しい声ではなく少し怖い声で言ってくるが

「はい!お願いします」

俺の決心は変わらない

もうあんな自分にはなりたくない!

「稽古は明日の朝、5時から始める...」
舞蝶あげはと柊二しゅうじにも話しておけよ?」

「お父さんとお母さんに?」

「当然じゃろ?朝早くに俺のところに出かけているなんて知らんで葵の部屋に入ってい

なかつたら、あの親バカ夫婦は大混乱じゃろ...」

どこか遠い目をして話すお爺ちゃん

ああそう言えば今の俺ぐらいの歳で、風邪を引いた時に

母さんと父さんが大騒ぎで病院に連れてってくれたんだっけ?

... うん、絶対に家に帰ったら言おう



「明日の朝5時からと学校から帰ってきた後に爺ちゃんの家で剣道を教えてもらいに行
くね」

そう二人に話すと

「ど、どうしたの急に?!」

「そ、そうだぞ? どうしてそんなことを…」

と、聞いてきた

「剣道をやって精神力と身体を鍛えて、運動でも勉強でも1番になる為だよ!」

よし、これなら小学一年生らしいぞ! さあどうだ!

「そうか… わかった父さんは止めないよ (そう言えば葵の部屋のマンガに剣道系のや
つあったからそれが影響だろうな) 頑張れよ」

「私もよ諦めないで頑張つて (アニメ? 仮面ライダー? なんの影響かしら)」

「うん、ありがとう父さん! 母さん!」

(まあ、そんなことよりも葵が可愛い)

明日の朝は早い為、ご飯を食べ、風呂に入つて寝た



その日から毎日が大変だった

朝5時前に起床し、爺ちゃんの家前に集合

準備運動をし、10分間走る

その後、腕立て10回5セット

腹筋10回5セット

背筋10回5セット

その後には剣道（型、構えを覚える事と素振り）の稽古&八極拳（折角だからどうじゃ？と言われたので）をした

学校帰りも行った

最初はキツかったが少しづつ慣れていった。が、本当に辛いのはここからだった
準備運動をし、20分間走る

その後腕立て、腹筋、背筋を20回を5セット

剣道（他に習いに来てた人との打ち合いなど）と八極拳の練習がもつと高度なものに

と、このように毎日の練習量が慣れる事に倍になっていくのだ
それでも俺は毎日欠かせずにトレーニングした。勿論、こうなる前からの知識がある
ものの、勉強も欠かさず行つた

あれから色々面倒なことがあつたが俺は順調に高校へと進学していた

道場では少年が1人で稽古をしていた。(爺ちゃんは道場を辞め、婆ちゃんと家で大
人しくしている)

まあ夕方の時間帯は義妹とか親戚の中学生とかと練習するんだけどね

「ふう、今日の練習おしまい」

タオルで汗を拭くと「ありがとうございました」と一礼し、急いで家に向かう、家に
着くと風呂に入った後に朝食を食べて高校に向かう。授業が終了し、帰宅すると義妹と
合流してある道場に向かつて練習。

これが俺の日常だ

そんなある日、俺は友達から面白そうな話を聞く、それが
完全^{フルダイブ}ダイブが可能となるVRマシン（ナーヴギア）のことだ。

元ゲーマーである俺は当然のように興味を持ち、色々調べた。すると次のことがわかった。

VRMMORPG・

正式名称はVirtual Reality Massively Multiplayer Online Role-Playing Game。

フルダイブマシンによる仮想空間を舞台とした新世代のMMORPG。

こんなゲームが発売されるとは!!と、驚いたがβテスターを募集している所があったので試しに応募してみると当選し、見事にプレイすることが出来た

そして、

2022年の11月6日ソードアート・オンライン正式サービス開始日

色々と設定を済ませ、微妙に重く感じるヘルメットのようなもの、ナーヴギアを頭にセットすると時間になるまで待つ

「父さんと母さんに感謝だな」

β版が終わり、ソードアートオンラインが発売されると知った俺は母さんと父さんに

頼むと1発OKで買ってくれたのだ。しかもラス1である

「さて、時刻は： 12時59分40秒」

そして時刻は13時丁度になったので叫ぶ

「リンクスタート」

デスゲームの始まりとまさかの出会い

「……」 はじまりの街

久しぶりだがやっぱり凄いなあこの世界は

にしてもよくこんなに世界を作れたな。茅場晶彦は……

茅場晶彦とは弱小ゲーム開発会社のひとつだったアーガスが、最大手と呼ばれるまでに成長した原動力となった。若き天才ゲームデザイナーにして量子物理学者である。

と、そんなことよりも日課のトレーニングの時間まであと……4時間くらいか、あまりやり過ぎないようにはしないとな

でもまあ、少し遅れるくらいなら良いだろ

そう思い、俺の視界の左上にあるβ時代に付けた名前と同じ”Aoi”という名前、それと俺の体力バーを確認してもう1度この世界に来たことを実感していた。

因みに俺の外見は現実リアルとほとんど同じの黒髪で170cmと、背の高い青年となっている。肝心の顔だが少し格好良くした。

べ、別にいいだろ?!

「さてと、武器を買ってからモンスターを狩りに行くか」

そう呟くと武器屋に向かい、安い片手剣を購入してからフィールドに向かった



「う〜ん： βテストが終わってから竹刀とか木刀振ってるから片手剣の感覚が鈍ってると思っただけどリーチが短い程度で問題はないな」

モンスターを狩り始めて数時間。

色々試したいことがあるため、イノシシ型のモンスター《フレンジーボア》などを黙々と倒していた。そのせいか、いつの間にか始まりの街からかなり離れていた

「： おっと、夢中になりすぎたか。う〜ん、狩りながら戻るか：」

進もうか戻ろうか考えていると後ろから声が聞こえてきた

「おーい！そのアンタ〜」

振り返るとそこにはバンダナを巻いた赤髪の男と、黒髪の男、そして可愛い少女がいた

「： あ、もしかして俺のことかな？」

自分の周囲を確認して誰もいないことを確認すると質問する

「お前以外に俺らしいかいな？ てか俺らが一番乗りだと思ったんだけどお前さんの方

が早くここで狩ってたんだな！」

「まあ俺はβテスターだからな…。そう言えばお前らってパーティなのか？」

そう質問すると黒髪の男は何か考えるようにじっとこつちを見ていて、もう1人の少女も俺のことをじっとみている。バンダナの男は笑顔を浮かべて返してきた

「いや違う違う、今このキリトにゲームを教わってたんだよ。こいつもあんたと同じで、ベータテスターだから上手いんだぜ！」

「へえそうなのか…。」

キリト…か

少し考えているとキリトがあっ！となにかに気づいたように声を上げる

「思い出した！貴方って誰よりも攻略を進めたっていう噂があるアオイさんですか?!」

俺のことを凄いい睨んでるなあと思ったら突然、詰め寄ってきて敬語で話し始めたキリト

「え、そんな噂があったの？」

「はい！βテスターなら知ってる人も多いと思いますよ！」

それを聞いていたバンダナを巻いた男は マジかそんな凄い奴だったのかよ?!と驚き、もう1人は俺の名前にビクツ！と、反応する

「なあアオイ？だったか？」

「あ、ああそうだけど…」

「もし良かったら俺たちと一緒に行動しないか？」

「く、クライン… そんな急に」

「別に大丈夫だぞ？ 急ぐ用事がある訳でもないし」

そう答えるとバンダナを巻いた男は

「マジかつ！俺はクラインだ、よろしくな」

「わ… 俺はキリトだ！よろしくな」

「僕はユウキだよ！よろしくね！」

「…（ゆ、ユウキ?!ま、まさかな）改めて俺はアオイだ… 少しの間だと思うがよろしく頼む」

自己紹介を済ませるとクラインが「アオイってレベルはどのぐらいなんだ？ 因みに俺は2だ」と聞いてきたので

「ん？俺は3だな… まああと少しで上がるけど」

するとキリトが、アオイの戦い方をクラインに見せてあげてと言ってきた。

「別にいいぞ〜」

と、軽く答えると丁度フレンジーボアが湧いた

「よし、やるか」

背中にあつた剣を抜き、腰におくと、気付いていないフレンジーボアに低い姿勢で走って近づく（あと少しのところで気づかれてしまったが）と3〜4撃斬りつける。

何か行動を起こそうとしたので反対側に回り込み、また剣撃をくらわす。相手を囲うように全方向から滅多斬りにしていく

すると倒したようでガラスを割ったかのような音とともに、青いポリゴンの欠片かけらとなくなり消えた。

「まあこんなもんだな」

後ろを振り返り、笑いながらそう言うのと3人とも引きつった顔で驚いており、キリトは苦笑していた

「は、速っ!? 凄いなアオイ!」

「お、お兄さん強いんだね〜!」

「さ、流石だね。出来ればソードスキル使って欲しかったんだけどね」

「あ、悪い忘れてた。めんご」

その後はクラインとユウキに教えながらレベル上げをすることになった



あれから数時間が経ち、クラインとユウキはソードスキルが使えるようになり、クラインは4、ユウキとキリトは5、俺は6レベルとなった

「なあキリト… このくらいにしないか？ 日課のトレーニングがあるんだ」

「トレーニングなんてしてるんだ… あ、そうだね。いい？ クライン、ユウキ」

「おう！ ピザの宅配を頼んでおいたから俺もそろそろ終わんねえとな！」

「僕も大丈夫だよ」

よし、終わるか… つーか

「準備万端だなあクライン」

「おうよ！ 俺の計画に抜かりは無いぜ！ あ、そうだ」

胸を張って言うのと、続いて思いついたように自分の知り合いを紹介すると提案してき
のだが

「え… うーん」

と、キリトが困っていたので断った

「そうか、わかった。お前らのおかげで助かったよ、もう時間だから落ちるけどこれから
も宜しく頼むぜ」

「おう、こつちこそよろしく」

「うん、訊きたいことがあったらいつでも呼んでくれ」

「おう。そんな時はよろしく頼むぜ」

クラインはメニューを開くとそのまま消え… ん？

「どうしたんだ？ クライイン」

「いや、どうしたもこうしたもログアウトボタンがねえよ」

「ボタンがないって…… そんな訳ないだろ、よくみてみろって」

「本当なんだよ！ キリトとアオイとユウキも見てみろよ」

「《LOG OUT》がないなんてそんな訳が…… は？」

半分冗談だと思いつつも嫌な予感がしたので俺もメニューを開き、ログアウトボタンを探すが…… 無い

「本当だ…… ない」

「僕の方もないよ？」

「…… ねえだろ？ ま、正式サービス開始初日だからこんなバグぐらいあるだろ」

「…… だよな。運営のミスかバグかなにせよ（もしくは元々こんな設定なのかだ……

いや、ありえない。そんな事をして何になる。それにしてもどうすればいいんだ？ 他にログアウトする方法なんて無いぞ）」

「ねえアオイ」

「ん？ どうしたユウキ」

「他にログアウトする方法はないの？ 例えば、戻れ！ ログアウト！
緊急脱出！
と
か？」

ベイルアウト

と

首を傾けてそう質問するユウキ…超可愛いんだけど

「ユウキ、言っても無駄だよ…」というか最後のは違うからな？」

リンゴーン…リンゴーン…

すると突然、鐘のような大ボリユームなサウンドがなり。俺たちを青い光が包む

その瞬間、俺達は《始まりの街》へと強制転移された

「ど、どうなってる？」

辺りを見回すとキリト、ユウキ、クラインがおり、それ以外にもプレイヤーが続々と転移されてきている。

みんなが何がなんだか分からないという表情をしており、ざわざわと声が発生した。

しかし徐々に苛立ち始めたようで「ふぎげんな」や「G M 出でこい」と次々非難の声

が出始めた。

そんな時、不意に誰かが叫んだ

そちらに目を向ける。そこには2つの英文が交互に表示されており、「やっと帰れる」

や「助かった」、「早くしろよ」と呟き声が漏れる。そんな声も無くなると同時に異変は

起こった

巨大な泥のような何かが雫のようにどろりと垂れていくと、段々ロープをまとった巨

大な人の姿になった。

「プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ」

と、低く落ち着いた。そしてよく通る男の声が聞こえた

「私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一人間だ」

隣にいるキリトが驚いている。いや、この場にいる人たちの殆どがそうだ。なにせ今まで茅場晶彦という人間はメディアへの露出を極力避け、ゲームマスターの役回りなども一度もしたことのないはず——なぜこんな真似を？

この場にいる全員が聞きたい疑問を茅場晶彦は淡々と説明していく

簡単にまとめると

1、ログアウトボタンが消失しているのは不具合では無く、<ソードアート・オンライン>本来の仕様である

2、上の通りであるため、自発的にログアウト出来ない

3、自分のヒットポイントがゼロになったその時、現実の自分もナーヴギアによって脳を焼かれ、死亡する

4、ゲームを攻略しなければ現実には戻れない（百層すべて）

5、4以外の戻る方法は無く、外部の人間が無理やりナーヴギアを外そうとしたり、停

止をした場合も脳を焼かれ、死亡。既に行った者たち、二百十三名のプレイヤーは全員死亡したらしい

6、テレビなどでこの事を報道されており、もう5の事は心配いらぬ。そして俺たちの本体

(現実の体)は病院やその他の介護施設に預けられているので心配はいらぬらしい

7、これは、ゲームであつても遊びではない

「そして最期にこの世界が唯一の現実であるという証拠としてアイテムストレージにプレゼントをが用意してある。確認してくれ給え」

そう言われるとアイテム欄を開く。そこにあつたのは《手鏡》というアイテムだった。その名前をタップすると身体が光に包まれた

「な、何が… は？なんで俺の顔が？」

「え… 義兄ちゃん?! やっぱりそうだったんだ」

俺は鏡から視線を外すと声の主に目を向ける

「ゆ、ユウキ?! やっぱりお前だったのか… というかなんでSAOを…」

「い、いや、義兄ちゃんのお父さんとお母さんが一緒にやったら？ って買ってくれたんだ」

「はあ、親父と母さんはユウキにも甘々だったなそう言えば」

2人で話しているとキリトとクラインも変わっていた。

クラインは山賊の様な顔で、キリトは女の子に……て、え？

「お前もしかしてキリトか?!てか女だったのか!」

「え、クライン?!というかユウキとアオイってにのみ……ムググツ」

キリトがリアルの名前を言おうとしたのでユウキと2人で口をふさぐ

「なっ!お前からアオイとユウキか!」

「ああ」

「う、うん」

「ユウキとアオイ……先輩もこのゲームやってたんだね」

「なんだお前らつてリアルの知り合いだったのか?」

「ああ、ユウキは俺の義理の妹で、キリトは家に剣道をしに行つた時に知り合つたんだ

よ」

「そうだったのか……てかなんで俺達のリアルの顔が……」

「あれじゃないか?設定で自分の身体を触つたろ?」

「あー!そう言えばやったなそんなこと、てかなんで茅場はこんな事をしたんだよ!」

「おいクライン落ち着け、多分今から説明すると思うから」

そう言うとは何か言いたげだったらしいがクラインは黙りこんだ

「諸君は今「なぜ」と思っているだろうなぜ・S A O・及び・ナーヴギア・開発者茅場晶彦はこんなことをしたのか」と

「大規模なテロ、身代金目的の誘拐そのどちらでもない」

「今の私はすでに一切の目的も理由も持たない。なぜならこの状況こそが私にとって最終的な目的だからだ」

「この世界を造りだし鑑賞するためにのみ私は・ナーヴギア・を・S A O・を造った」
「以上で・S A O・正式サービスのチュートリアルを終了する」

プレイヤー諸君の健闘を祈る」

そう言い終わって消えると同時に

「なんだよこれうそだろ！」や「ふざけるなよ出せ！ここから出せ！」と激怒する者

「どうすればいいのこれから！」と混乱して何をすればいいか分からない者

「誰か助けてくれ！」と他人だよりの者

「いやああ帰してよ」とひたすら言い泣き叫ぶ者

まさにパニック状態だ。こんな場所にいたらやがて周りに影響されてこの二人にも影響が出て、駄目になってしまう。

そう考え、人気のない場所に三人を連れて行こうとするとキリトも同じ考えだったよ

うで二人でユウキとクラインを引っ張っていった

「私は今から次の村に行こうと思うんだけど一緒に行かない？」

「まあお前が言いたい事はわかる。この世界で生きていくためにはひたすら自分を強化しなければ生き残れない」

「そしてこの・はじまりの町・はお前と同じ考えの奴らに狩り尽くされるし、今のうちにβテスターであるお前と一緒に安全な道を通り、次の村にいち速くたどり着けると言うわけだろ？」

「うん」

「だが、クラインお前って俺たち以外に仲間がいるだろ？」

「ああ他のゲームで落ちた奴らと一緒に徹夜で並んで買ったからな。そいつらもまだその広場にいるはずだ。置いていけねえ」

「と言うことでお前には俺が着いていく…ユウキもそれでいいだろ？」

「そう言うのと下を向いていたキリトが顔を上げる

「え？」

「何驚いてんだよ、良く考えろってこいつとその仲間と一緒に残ったとして、俺とユウキが入って気ままずくなったり連携を壊しちまうかも知れねえだろ？」

「だったら俺たちが組んで次の村に行くのが効率が良いって訳だ」
「それにβテスター」

が二人もいればユウキも超安全だしな！　それで大丈夫か？　クライン」
「ああそれが良いと思うぜ」

そうクラインに同意されてキリトにも「相変わらずシスコンだね…　よろしくねアオイ先輩！」と、了承を貰い、クラインと別れた

その別れ際、クラインに「両手に花で羨ましいぜこの野郎！　ちゃんと2人を守つてやれよ！」

と言われたので

「分かった。また会おうクライン」

拳と拳を重ねた後に《始まりの街》を出発した